

# 保育する“私”を見つめる

〈いぎいぎしき〉を保つために

嶺村 法子

## 三年保育四歳児

——四月三十日の記録より

「先生、ケンジくんが土出してる……」という声を

聞く。見ると、ケンジは園庭に出る階段の途中に腰掛けて花壇の隅を掘っているところで、その土が外にこぼれている。私は「ケンジくん、お靴見てごらん。その靴でお部屋に入ると泥だらけになっちゃう

よ。他のお友だちもそれ踏むと汚くなっちゃうから、土を外に出すのはやめようね」と声をかける。

その時のパチッと見上げた目……。

ケンジはその前の週、プランターの後ろのダンゴムシを熱心に探していた。この日も虫探しのつもりがどんどん穴掘りになって、スコップから土がこぼれ落ちたのだろうと思う。こんな風に一方的に注意

をする前に、ケンジが何をしようと思っっているか聞いていれば……。私は、ケンジのことを考えてというより、ケンジのことを言いに来た女児に対して、その子の納得のいくような対応をしていたのではないかと反省する。

ケンジは一言も弁解しなかった。私が一方的にしゃべったから言ってもしょうがないと諦めてしまったのか……。無言で私を見上げて何か言いたそうな目が忘れられない。

ケンジは、その後もそこに座って土いじりをしていた。

私はというと、一方的に注意した後、部屋でこのぼり作りにかかっていた。こいのぼりに限らず製作するものがあると、どうしてもそちらの方に目が向いてしまい手が取られてしまうことはあるけれど、でも、気持ちさえあればケンジに対してもっと別のかかわり方ができただろう。

この後O先生がきて、ケンジに「一緒に砂場に行こう」と声をかける。何人かがその声を聞いてついでに行くが、ケンジは行かない。私も「お砂場に行ってきたもいいよ」と言ってみるが「行かない」という。

ケンジは砂遊びがしたかったのではなくて、やっぱり虫探しがしたかったんだろうと思う。私が「こっちの方にダンゴムシがいるかな？」と、プラントーを移動するなどして別の場所を示していれば、虫探しに熱中できたかもしれない。でも、ケンジが春の陽差しの中でのおんぴりと行なっていた行為そのものを否定しなくてよかったと思う。土を外に出さないようにという注文は付けたけれど……。

この時のケンジの姿を思い起こしながら、私はレオ||レオ||ニ描くところのネズミのフレデリックを思い出した。子どもにとっても大人にとっても、た

だぼんやりと過ごす時間というのにも必要だろうと思う。しかし、そのぼんやりが、何もすることがなくてそうしているのか、何もしていないように見えるけれども、その子にとっては意味があることなのかを見極めることは難しい。

しかも、その後ケンジが砂場に行かず何をして遊んだのか、記憶がない。そこが私の甘いところだと自分でも思う。最後まで見届けていない。

それともうひとつ。

「こうしたらどうだろう」と私の考えを示せば、ケンジも「そうじゃなくてこうしたい」とか「いいよ」とか、自分の気持ちを表現したのだろう。この時もO先生の誘いに「行かない」と意思表示しているのだから。そういう私からの働きかけが足りないのだろうと思う。

子どもがやっていることを否定せずに認めるということ、そのおもしろさ、楽しさに共感するということ、私の思いや考えを伝えるということ——こう

いう時は見守って、こういう時は一緒に楽しんで、こういう時はもっと楽しくなるようにアイデアを出したり、場所や物を一緒に作ったり——ということが、自分の中でも明確になっていないなあ、もやもやしているなあ、と思う。その子が何を楽しんでいるのか、何をしたいと思っているのか、もっとじっくり見て感じとる目を養わなくては、と思う。

### 明日の保育に向けて

共に生活する大人として、その子のために、その子と一緒に「私」は何をしたいのか、もっと自分の思いを表現し、伝えていこうと思う。子どもには、やりたくないことは「やりたくない」と表現できる力があることを信じて。

### 私が変わったことでケンジも変わった

——五月三十日の記録より  
ケンジがジョイントマットをつなげてどんどん広

げていく。「先生見て」と言うので、「わあ広いおうちになったね」と応える。

その後、ケンジはタカオと二人でウルトラマンのテープをかけ、ポーズを取り合っている。私が、廊下の歯医者さんで積み木のベッドに横たわり治療を受けている様子を、二人が交替で興味深そうに見にくる。「二人は私と遊びたいのかな」と思う。

ケンジ、タカオの二人は、折り紙を持ってきて丸めて、Bブロックをつなげた電車の上に乗せている。「あれっ、何が乗ってるんだらう？」と声を掛けると、ケンジが「おにぎり。お寿司作ってるの」と言う。

部屋では朝からテーブルでのり巻き作りをしており、ケンジはそこには来なかったが興味を持っていたことがわかる。「私も一緒に作ろう」と思い、材料（紙と糊）を二人のところに運び、作り始める。

ケンジが「これエビなの」と赤い色紙を折ってシッポをねじった物を指差す。私は「じゃあ御飯もあつ

たほうがいいね」と紙を丸めエビを上に乗せ、両面テープでとめる。ケンジと一緒にもうひとつ作る。

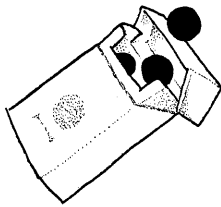
ケンジは「僕、納豆巻き好きなの」などしゃべりながら作る。「ケンジくんって納豆巻き好きなの？

おいしいよね」と応えながら、ケンジが自分の好みについて、こんな風に自分から私に話しかけてきたことがあったらどうか、とうれしくなる。私がかごを用意し「ここに置いておく？」と言うと、作ったお寿司をその中に並べ、ケンジは「ここに冷やしてあるの」とままごとの白い棚にいれる。

他の子に呼ばれ私がその場を離れた間に、二人は外に行ったらしいので

様子を見に行くと、ユウコが「ケンジくんと忍者やってるの!」と言う。「えっ? あっ

という間に違う遊びになってる!」と驚く。



ケンジ、タカオ、ユウコら五人が池の前でかたまつて何やらしゃべっている。ケンジが「隊長はタカオくんね、わかった？」とユウコに言う声が聞こえてくる。

「私もケンジ達と一緒に遊ぼう」と思い、丸く切つた段ボール紙を持ってきて近くに行き、手裏剣の形を描く。「なんだ？」と見に来たので、「この手裏剣があれば大丈夫だ！」と飛ばして見せる。「僕も作って！」と言う声に応えて段ボール紙に絵を描く。他の男児も二人加わる。

ケンジは次々にイメージを出してくる。ケンジ「悪者の忍者がきた！」私「よし、やつつけよう」ケンジ「敵の城はどこだ？」私「あそこかもしれない。見付からないようにそうつと行こう！」ジャングルジムを敵の城に見立てて、鍵を壊し、中に入り、宝を探して……。そこへまた別の男児が二人来て「よし、ロープを持ってこよう！」と部屋から縄

を持って来る。宝を見付け（ちょうど私が、別の女児からもらったチェーンのプレスレットをしていたので、それを宝にする）ロープで吊り上げたり、穴を掘って隠したり……。小学校のサッカーゴールの網と網の間に入って「つかまったぞ」「助けて」と仲間を呼んだり、つかまった仲間を助けに行ったり、……。ハルキが「チョキチョキ！」と切る真似をするのを見てケンジが「チョキリットビーム！」と新しい技を考え出す。

排水口の網を見てケンジが「これは畏かもしれない！ 踏むと爆発するぞ！」と叫ぶ。「この穴を通って逃げたな」「忍法小さくなるの術だ！」「このヒビはなんだ？」「これも畏かもしれないぞ！」。他の子どもたちも次々に自分のイメージを出してきて、話がふくらんでいき、ケンジの顔も紅潮している。

### 記録を読み直し省察を加える

この日（五月三十日）、ケンジたちと遊んだ私は

とても楽しかった。道具など何もなくても「つもり」になって遊べる四歳児の世界を共有できる喜び！を満喫したとも言えはよいのだろうか。

その最初のきっかけになったのは、「二人は私と遊びたいのかな？」と感じたことだった。もしあの時、そう感じなかったら、あるいは感じただけで私のほうから声をかけなかったら、ケンジが何に興味を持っていくかもわからなかったし、その後ケンジたちを追いかけて行ってまで一緒に遊ぼうとは思わなかっただろう。

では、「なぜそう感じ、声をかけたのか」と考えてみる。同じ場面に出会っても人により感じ方は様々であり、その感じ方によって対応のし方も様々である。ここでは、「私からの働きかけが足りないのだ」「もっと自分の思いを表現し伝えていこう」と省察したことが、ケンジに対する感じ方・かわり方を変えるきっかけになっている。今までの私だったら、「ウルトラマンごっこをして楽しそう」

とか「電車で仲よく遊んでいるな」としか感じなかったかもしれない場面で、私の方から声をかけ、私の方から材料を運んで、「一緒に遊ぼう」という気持ち表現している。その裏には、子どもには、やりたくないことは「やりたくない」と表現できる力があるのだという省察から得た、子どもへの信頼がある。

そして、その信頼に応えるように、ケンジたちは、私とのお寿司作りを早々に切り上げて、自分から遊ぶ遊びを始めている。その変わり身の早さに驚きながら、そこでも子どもたちへの信頼があるから、「私のやりたいことをやってみよう」と手裏剣作りを試みることができたのだと思う。

この日の流れを追ってみると、ケンジたちにとって、家を作ったり、ウルトラマンになったり、お寿司を作ったりしていた時間は、自分が心から打ち込める遊びを見付けるまでの過程として必要だったのだろう、と思えてくる。私自身もあれこれ試したが

らその過程に付き合ったことが、その後の遊びで、それぞれに自分を発揮することにつながったのではないかと思う。

## 明日へ

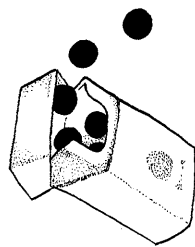
——いきいきと共に生きるため

“私”の気持ちの持ち方ひとつで、子どもとどういう世界を創り出せるかが決まってくるのだから、保育者の役割は計り知れない。単に“人的環境”などという言葉では片付けられない。“存在そのもの”が問われているように思う。子どもにとって、私の動きや言葉や雰囲気といったものは決してバラバラに感じられるのではなく、私という存在の全体が影響を与えているのである。私がそこにどう存在しているかによって、子どもたちはいきいきもし、またつまらなくもなるのである。

「虫探ししているのかな」「土いじりしているから見ていよう」と思っているだけでは、それだけで終

わってしまうが、私のほうから働きかけたことと子どものやりたいことがびったり合った時には、子どもも私にいきいきした楽しい時間を過ごすことができるのだ。もしもびったり合わなかった時は、その時そこで軌道修正すればよいのだから、とにかく

“私”の思いを表現し、伝えてみないことには先に進まない。そして、びったり合った働きかけができるかどうかは、私が如何に子どものことをよく見て子どものやりたいことを理解しているか、私自身が子どもと楽しもうと思っているかにかかってくる。今さらながら、私が楽しくなければ子どもも楽しくないのだということを実感している。



いきいきしき

——倉橋惣三『育ての心』より

こうして、私自身がいきいきと生きることなくして、子どもがいきいきと遊ぶ生活は生み出せないのだということに思いを巡らせていたとき、ふと読み直した『育ての心』の中には、すでにそのことがずしりと重い言葉で語られていた。

『(前略) あなたの目、あなたの声、あなたの動作、それが常にいきいきしていなければならぬのは素より、あなたの感じ方、考え方、欲し方のすべてが、常にいきいきしているものでなければならぬ。どんなに美しい感情、正しい思想、強い性格でも、いきいきしさを欠いては、子どもの傍に何の意義をも有しない。』

鈍いものは死滅に近いものである。一刻一刻に子どもを蝕み害わずにはいない。いきいきしさを抜

けた鈍い心、子どもの傍では、このくらい存在の余地を許されないものはない。』

〈いきいきしき〉——この詩的な言葉には、今も昔も変わることのない保育の心と、保育者に求められる資質と、保育の楽しさと難しさと、そのすべてが言い表されている。

(東京都中央区立明石幼稚園)

\*この事例は、平成七・八年度東京都中央区教育委員会研究奨励園として取り組んだ研究〈いきいきと共に生きる——わたし自身を省察する——〉の一部である。

\*三年保育四歳児、男児十四名、女児十名の学級で、昨年度(三歳児)十一月の育児明けから引き継ぎ、そのまま持ち上がった。

\*本文中の子どもの名前はすべて仮名である。